

【キーワード】

〔施設種別〕 高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅 ()
 〔運営主体〕 市区町村 法人 NPO 個人 (補助金) 内閣府 国土交通省 厚生労働省 ()
 〔建物形式〕 1棟単体型 複数棟集合型 団地型 (建物状況) 新築 増築 改修 一部改修 既存
 〔対象者〕 高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代



写真1. 外観写真

JOCA 大阪は青年海外協力協会の近畿・四国支部の事務所機能と地域住民が自由につかうオープンカフェを含んだ建築である。事務所とカフェに間仕切りがなく、地域住民とスタッフや、カフェのセルフ利用、利用者同士が日常的に交流を深めている。また、地域イベントの会場や市民活動団体等へフリースペースの貸し出しも行い、地域再生活動の拠点施設としての役割を担っている。

見学日：2018年12月13日

案内者：JOCA 大阪代表 河合憲太氏

見学者：山田あすか、松原茂樹、瀨崎裕子、大島千帆、古賀誉章、小篠隆生、古賀政好、目黒友子、出口寛子、鈴木ひかり、榎村賢

■施設概要

所在地：大阪府摂津市正雀本町1丁目20-7

施設種別：オープン型オフィス

運営主体：公益社団法人 青年海外協力協会

設計：株式会社五井建築研究所

延床面積：174.32㎡

建築構造：木造（文化住宅の改修）

運営開始：2018年7月21日

開始時間：10時～18時

休館日：日曜日、月曜日、祝日

■運営概要

JOCA 大阪は、青年海外協力協会 JOCA（青年海外協力隊のOBOGを中心に構成される組織）が全国に構える8か所の拠点の1つで、大阪府摂津市の正雀（しょうじゃ

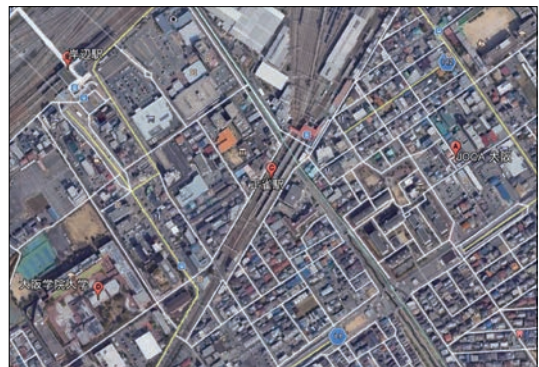


図1. 立地周辺 (googlemap から引用)

阪急京都線 正雀駅から徒歩3分 JR 京都線 岸辺駅から徒歩約10分の商店街に隣接する、人通りの多い小さな路地に沿って建っている。

参考文献

- 1) 公益社団法人 青年海外協力協会 (<http://www.joca.or.jp/about/offices/kinki.html>)
- 2) 株式会社 五井建築研究所, <<https://www.goi.co.jp/works/>>



写真2. 周辺の様子

建物は路地の突き当たりであり（写真上）、夜は路地に対して明かりを提供している。周辺には文化住宅が残っている。

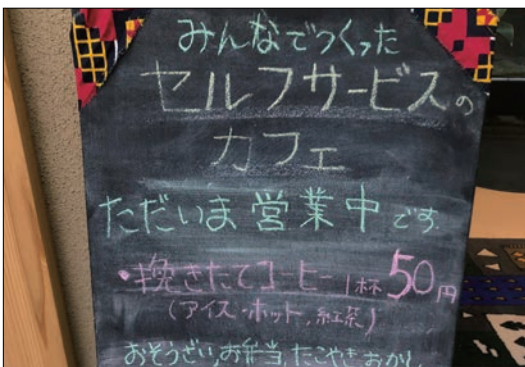


写真3. 入口の雰囲気

一階部分の入口や路地側側面はガラス張りで、中での活動の様子が外からよく見える。人がいる姿が、この場所の広報につながっている。「みんなで作ったセルフサービスのカフェ」の看板が掲げられており、Wi-Fiも使えるので子供たちもよく寄りついている。

く）地域に所在する。以前は大阪・梅田の中心部にあるビル内に事務所を構えていたが、籠った部屋で「地域とのかかわり」がない実態に違和感があったことから、地域での活動の拠点性をもった場所で、かつ、より安価な家賃で間取りが広い物件にオフィスを構えることとしたものである。大阪府内で50件以上もの物件を探すなかで、古い文化住宅の空き家を当地に見つけ、改修を行った。

事業は地域の活性化に向けた各種自主事業のほか、国際理解教育のための出前講座講師派遣など JICA（（独）国際協力機構）の委託事業などをおこなっている。スタッフは2人（当時）常駐しており、地域住民が利用している横で仕事をしている。さらに、カフェのセルフ利用や地域イベントなどでフリースペースの提供を行い、地域住民との交流を深めている。

■青年海外協力協会 JOCA ジョカ

開発途上国でのボランティア活動（青年海外協力隊）で培った精神や経験を活かし社会還元活動を国内外で行っている全国組織である。地方公共団体等と協働し、地方創生を目的とする様々な分野を巻き込む総合的な新しいまちづくり事業や国内外の援助機関・国際協力団体等との協力及び連携に関する事業を全国や海外にて行っている。学校や大学等での講演活動における講師派遣の依頼を受けての調整等も業務に含まれる。近畿と四国の支部となる JOCA 大阪は、それら事業と地域の活性化を実践するため、住宅地域のなかに位置する摂津市正雀に拠点を構え、多世代・多文化の人々と日常的な交流を通じて地域社会の課題解決に取り組み、地域貢献を目指している。

JOCA の会長は雄谷良成氏（社会福祉法人佛子園理事長、一般社団法人生涯活躍のまち推進協議会会長、元青年海外協力隊員）が務めている。JOCA 大阪の開設はスタッフが、佛子園が石川県で展開している“ごちゃまぜ”の地域づくりを視察し影響を受けたことがきっかけとなった。その考え方や取り組みを手本に、青年海外協力隊の各国現地での地域コミュニティでの生活経験とを混ぜ合わせて、“人が中心となる拠点”を地元の人々と一緒に創っていくことを実践していくこととなった。



写真4. 内観

耐震補強のために入れられた白木と鋼材、壁面にはベニヤの素朴な内装。ファブリックがアクセントである。

■ 建築について

近畿地方で「文化住宅」と呼ばれる、1950-1960年代に建てられた一群の和洋折衷住宅がある。瓦葺きの木造モルタル2階建てで、風呂なしのいわゆる木賃アパートであるが、これらが残る古い地域ではレトロな景観を生み出している。当地はこうした文化住宅が並んで残る一角である。クランクする路地の突き当たりに位置し、アイストップの効果がある立地であることも特徴的である。

元々は1階にクリーニング屋・スナック・酒屋、2階には住居が入っていたが、空き家になっていたこれら建物の改修による。1階の4部屋のうち1部屋(向かって右)は、隣接する花屋の店舗として使われているため、この箇所以外を改修利用している。地域に開かれたオープン型オフィスを目指し、一階にはセルフのカフェ機能を備



写真5. 内観

近所の人々が自由に使うことができるオープンカフェ&オフィス。スタッフはカフェの利用者と同じ机で仕事する。込んでくると場所を譲ってスタッフはカウンターや階段で作業をすることもあるという。



写真6. リサイクルと手づくりの家具

椅子は組み立て式のもので、同じものがないことで味がある。机は古パレットをつかった手づくりで、天板のガラスを通してメダカが泳いでいるのが見える。それが外からも見えるように配置され、窓ガラスに「のぞいてみてね」と書かれている。通称メダカテーブルは、DIY制作に参加した住民が考案したものである。



写真7. 家具づくりの様子と展示テーブル

家具づくりの様子（写真上）、場所づくりの記録が写真パネルになってテーブルなどに展示されている。後から参加した人も場の経緯を理解できる仕掛け。

えたオープンスペースを作り、地域の方々が好みの場所を見つけ、くつろげる空間にしている。

耐震補強を含む基本的な改修は五井建築研究所の設計により、家具や内装は地域の方々、青年海外協力隊のOB・OG、JOCA 職員等、のべ約 100 人による DIY でつくられた。

おおよそ3ヶ月にわたる工期のあいだ、毎日外でDIYを行っており、何をしているのかと通りがかる近所の人に声を掛けられればこの場所の趣旨と、大作業が得意な人が居れば教えて欲しいというような対応をしているうちに近所から応援の手が加わるようになり、オープン後に常連として定着した人々もいる。改修作業を見せること、またオープンな枠組みとして自然な参加が促される取り組み体制であったことが、この場所の広報にも繋がるという考えである。また、一階部分は路地側がガラス張りになっており、路地を歩きかう人に対する宣伝の効果を発揮している。外観、また内装で目を引くのが民俗柄のファブリックである。東南アジアやアフリカで暮らしていた代表や関西に在住している青年海外協力隊のOBOGが現地から持ち帰った色鮮やかな布を2階のベランダに掲げている。

2階部分は全4室あるうち3室をJOCA大阪で借り上げている。事務作業スペースや資機材の収納スペースとなっている。2階に繋がる外階段は元から大家が撤去していたので（完全に空き室状態のため）、建物内部に階段をつくった。身近手方向の壁を抜いて、連続して使用できるように改修している。

■ JOCA 大阪での活動内容

JOCA大阪では、普段1階をオープンカフェとスタッフが各種おこなっている事業のオフィスワークのスペースとなっている。子ども、学生、社会人、お年寄り、障害者、外国籍の住民など、誰でも自由にオープンカフェが使える。小中高生や宿題やゲームをしたり、近所の高齢者が囲碁や将棋を嗜んだり、子育て中のママたちが子連れでおしゃべりや茶話会をしたり、独りコーヒーのくつろぎ時間を過ごす人など、さまざまな世代が自然に共存している。

夜や週末等で貸し切り利用やテーブル予約地元の趣味

教室や、各種活動グループ、学生サークル、異業種交流会などがイベント・セミナーの会場としても解放している。また、青年海外協力隊（全国で一斉公募される）の応募相談所として JOCA 大阪のスタッフが相談員として社会人や学生などの往来に対応している。

■地域住民との関係性

地域住民の中には JOCA 大阪の常連となる人もいる。キッチンにはマイカップ棚が設けられていて、ここを使いたい人は自分たちでカップを持ってくることになっている（自由に使える共用カップもいくつか置かれている）。お茶、コーヒー等もセルフサービスで、対価としていくらかのお金を入れる。「ものを置く」ことは、その場所のパーソナライゼーションにつながる行為の典型であり、つまり「この場所をあなたのテリトリにして欲しい」というメッセージが埋め込まれた仕組みとなっている。また、お茶やコーヒーを自分で煎れる仕組みはマギーズ・センター（イギリス発祥の、がん患者とその家族のためのサロン）とも同様に、その場所の主（ホスト）としての役割を自ら担うという主体性の喚起の効果がある。

このセルフ利用のフリースペースは毎日多くの地域住



写真8. キッチンとマイカップ棚

利用者はセルフで飲み物を用意する。洗い物も自分でする。キッチンには「マイカップ棚」が設けられている。

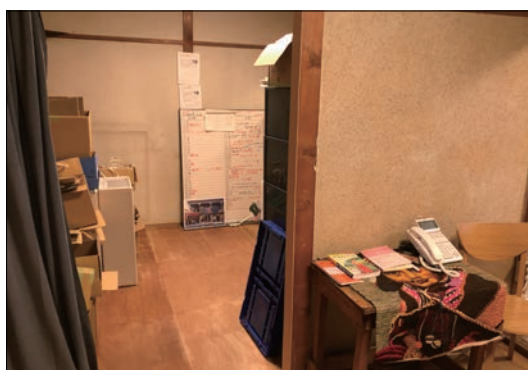


写真9. 2階事務所

2階部分は事務スペースである。外付きの階段が撤去されていて2階に上がる動線がなかったため、室内に階段を設置した。



写真10. ファブリックが印象的な外観

開けるときに2階の手すりに布をかける。のれんのような意味合いだが活気ある雰囲気演出される。

民が利用しており，利用者同士の接点が生まれている。スタッフと利用者の間にも顔見知り以上の関係が生まれており，地域住民同士の生存確認の機能や人脈の形成拠点となっている。台風で近隣の住宅に被害が出たときには，ここから人手が出かけていたり，修繕のための道具や材料の貸し借りなど，災害時の助け合いの拠点としての機能も果たした。

（作成 東京電機大学 加藤瑞基 2020
加筆・校正 東京電機大学 山田あすか 2020.11.20,
加筆・校正 JOCA 東北 河合憲太様 2021.03）